

## (6) 高等学校の実践

### ア 研究のねらいに迫る題材の工夫

主体的な学びを成立させるためには、題材を通して当事者意識をもたせることや、学習活動の中で新しいことを発見させたり気付かせたりすることが重要になると考えます。研究のねらいに迫るために、高等学校では、図1のような流れで実践を行いました。

また、研究の概要で述べたように、家庭科では、生活に関わる判断をするときに批判的思考力が必要とされており、物事を多面的・多角的に捉えることが大切です。西村は消費生活に関わる判断について、「判断にあたっては、個人としてのニーズとウォンツのみではなく、社会的な影響への配慮も欠かせません。価格が安くても、期待する品質が確保されるのか、環境へ負荷をかけている可能性が大きい商品ではないか、生産国での社会経済状況なども場合によっては考えてみる必要があるでしょう」<sup>(1)</sup>と述べています。そこで、今回の実践で取り扱った、衣服の購入場面において育てたい多面的・多角的な見方の一例について、表1にまとめました。黄色の部分には1・2時目に、緑色の部分は3時目に育てたい見方になります。さらに、題材の問いの設定と生徒の思考の流れの関係を次頁図2に示しています。

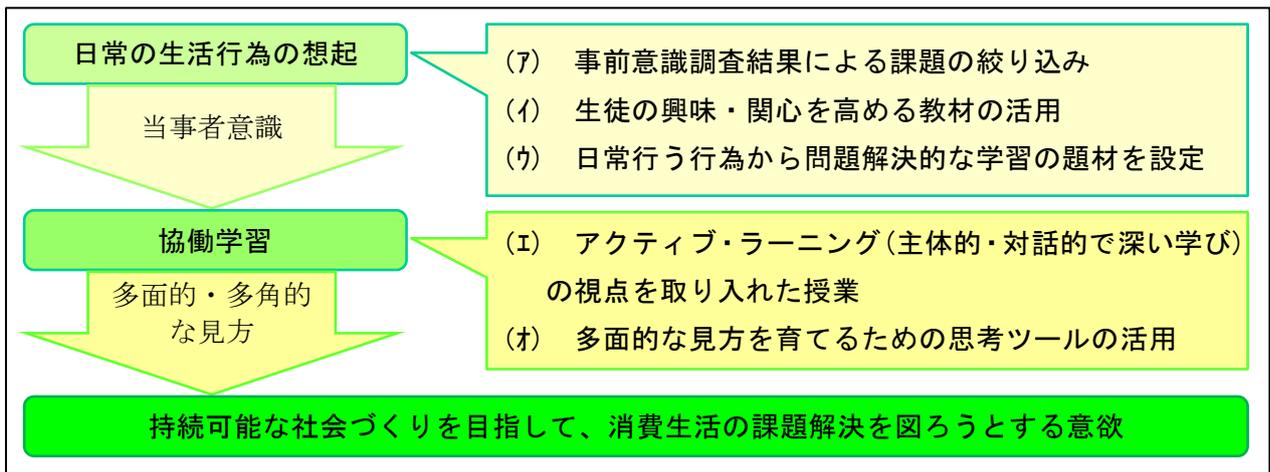


図1 高等学校の研究の流れ

表1 高等学校の実践における多面的・多角的な見方の一例

		多面的な見方			
		1 経済的な側面	2 社会的な側面	3 文化的な側面	4 利己的な側面
多角的な見方	A 個人の立場	・安さ ・素材やデザインに見合った価格	・ファストファッション ・ハイブランドに対する安心感や優越感	・衣服の着方	・できるだけ安いもの ・流行のもの ・着心地のよいもの ・付加価値(美脚効果など)
	B 全体の立場	・安い衣服が作られる理由 ・リサイクル費用 ・流通に掛かる費用	・資源は枯渇する ・大量消費、大量生産 ・環境問題 ・低賃金労働 ・発展途上国の問題	・衣服の国際化	
	C 消費者の立場	・品質と価格 ・耐久性	・日本製と他国製の違い ・デザイン性の高さ	・使い捨て文化 ・最後まで使いきる文化	
	D 生産者の立場	・労働に見合った賃金 ・ブランドとしての価値	・低賃金労働 ・労働者の健康問題 ・フェアトレード ・地産地消	・より長く価値あるものとしての利用	

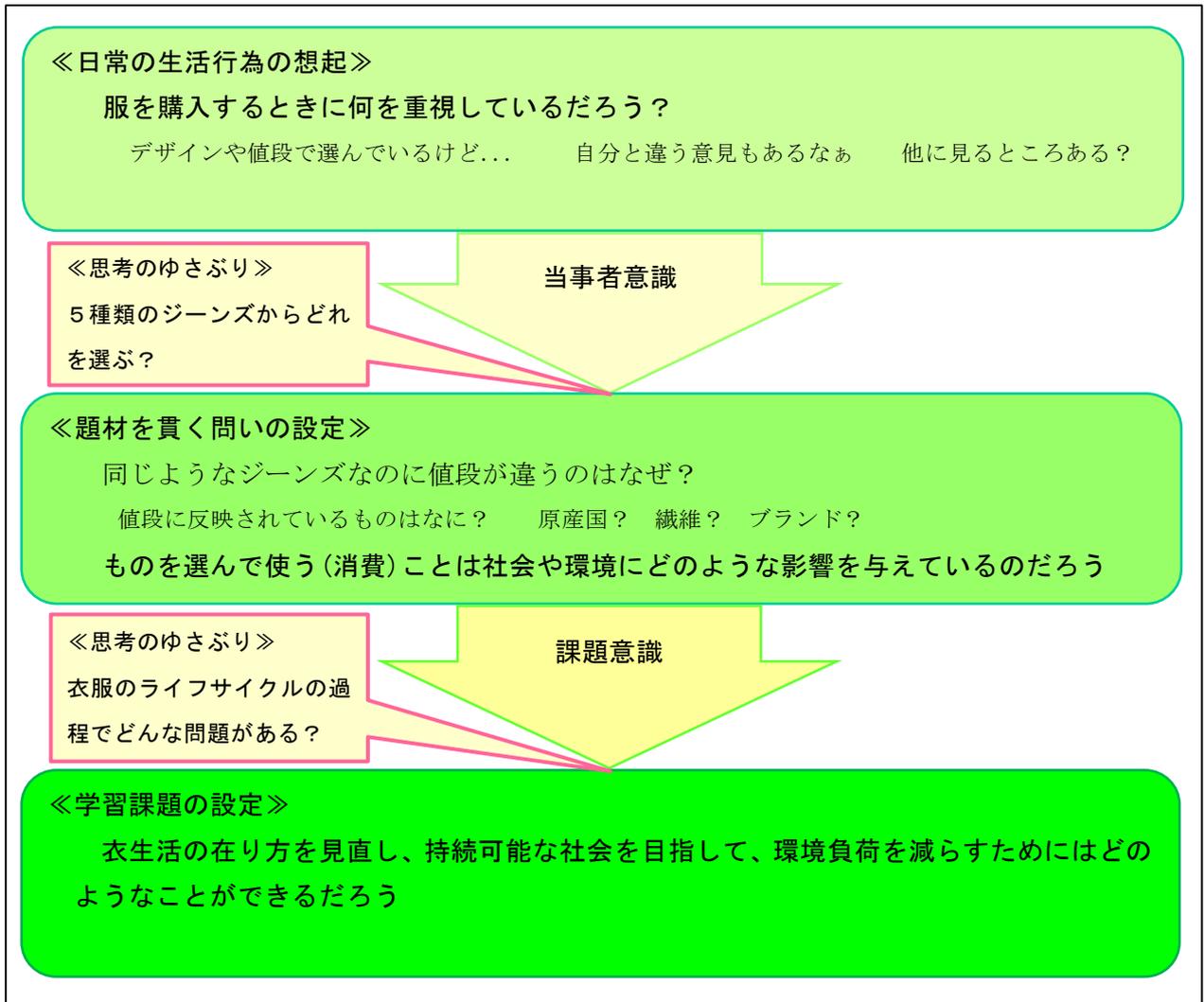


図2 題材の学習課題の設定と生徒の思考の流れ

(7) 事前意識調査結果による課題の絞り込み

日常の生活行為の想起

2016年6月に事前意識調査として「家庭生活アンケート」を実施しました。

服装を自分で決めたり、過ごしやすいうちに部屋の温度や空気を調節したり、挨拶をするなどの項目については「いつもする」の回答が多いのですが、料理を作るやボタンがとれた時にボタンを付ける、パソコンを使って暮らしの情報を集める、包装や入れ物がゴミになりにくいものを選んで買うという項目については、やっていない方の割合が高くなっています(図3)。身近で興味があること、あるいは快適に過ごすために必要なことに関しては、実践している割合が高いといえます。逆に、知識や技能が必要なこと、家族や地域のことを考えなければならないことに関しては、消極的でなかなか実践できていない状況がうかがえます。

同じ選択肢の問い「もっと進んでするようにしたいと思うこと」とその理由の回答を見ると、簡単にできる項目の回答が目立ち、生徒たちの興味が高い食生活に関する項目が他の領域に比べると回答数が増えています(図4)。図5の「もっと進んでするようにしたい理由」と合わせて見てみると、大人になると必要だから、自分のためになるからの回答が多くなっています。一方、環境に良いから、住みやすい地域になるからの回答は少ない状況です。このことから、環境や地域に対する興味・関心はあまり高くないものと考えられます。また、使うお金が少なくてすむという回答も少ないため、自分たちの消費行動(消費生活)が家庭

生活や環境、地域と関係しているということを理解していない状況もうかがえます。

このような状況から、消費生活に対する興味・関心を高めるとともに、多面的な見方を育て、消費生活が様々な生活事象と関係があることを理解させる必要があるのではないかと考えました。

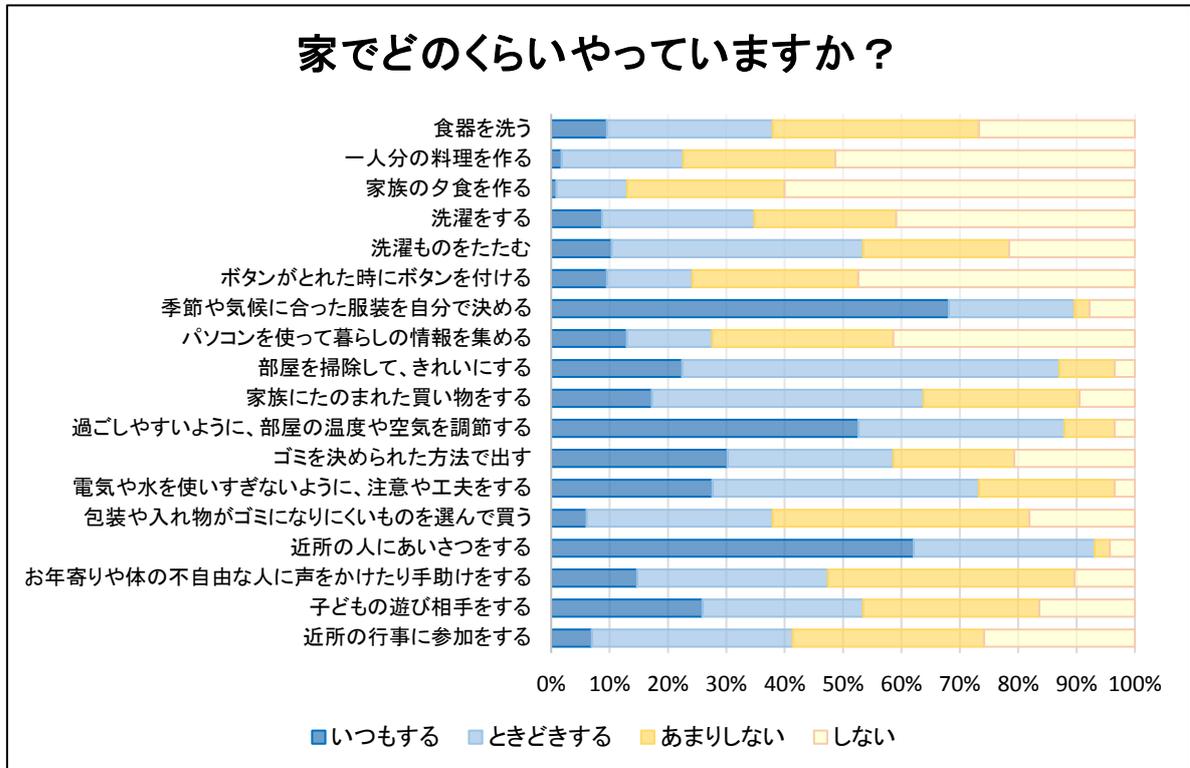


図 3 学習前の家庭生活アンケート

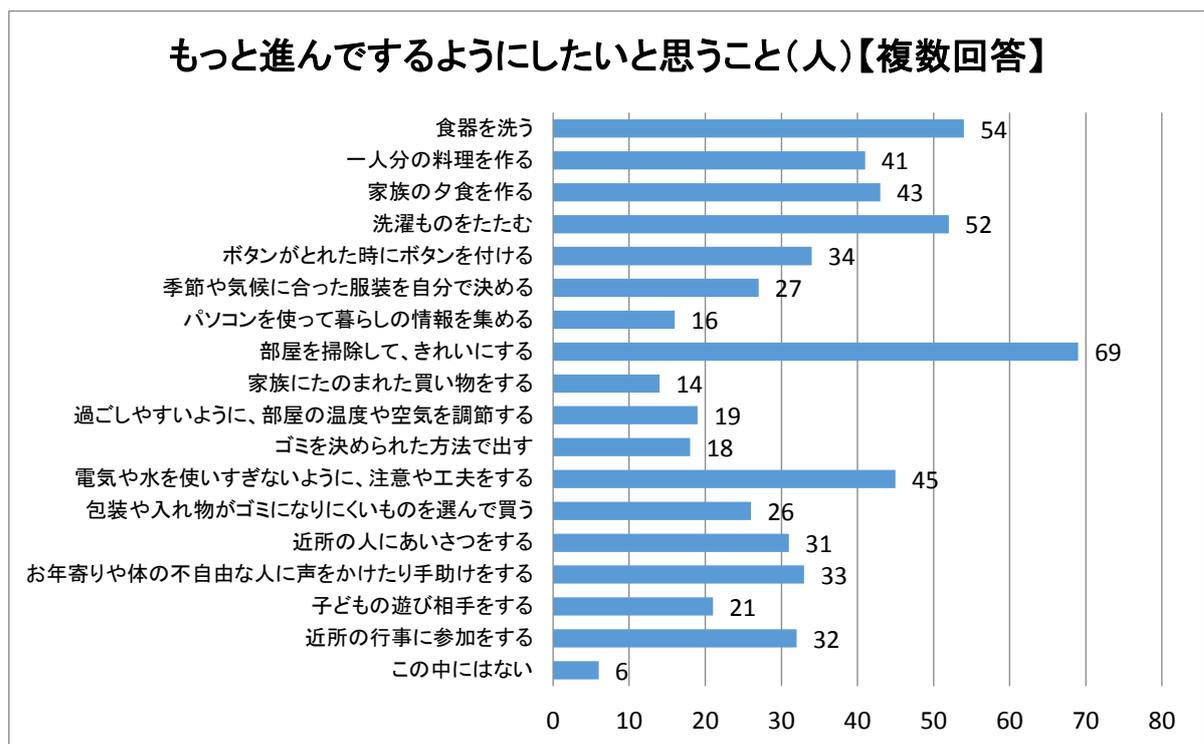


図 4 学習前の家庭生活アンケート

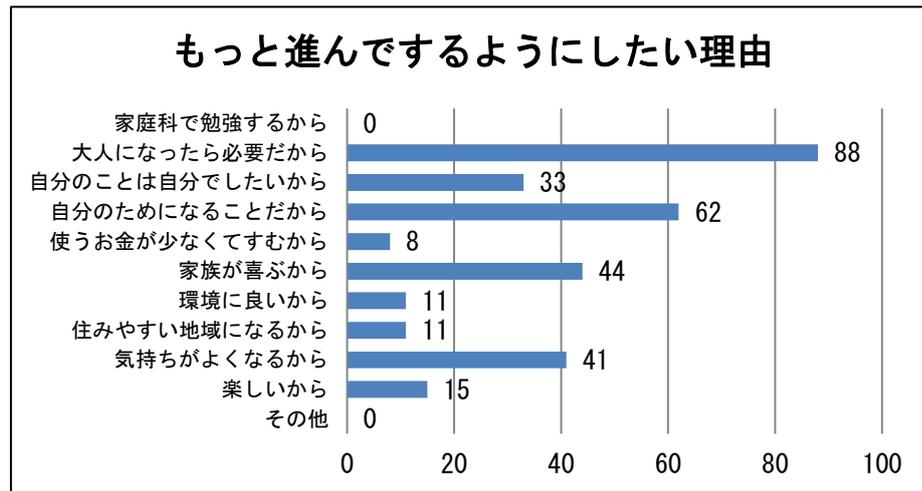


図5 学習前の家庭生活アンケート

**(イ) 生徒の興味・関心を高める教材の活用**

日常の生活行為の想起

高校生になると中学生より行動範囲が広がり、消費行動も広がってきます。学習前の「家庭生活アンケート」の結果によると「今、欲しいもの」として、52名(44%)が「服」を挙げています。「靴」まで含めると約60%の生徒がファッション関係のものを挙げていることとなります(図6)。

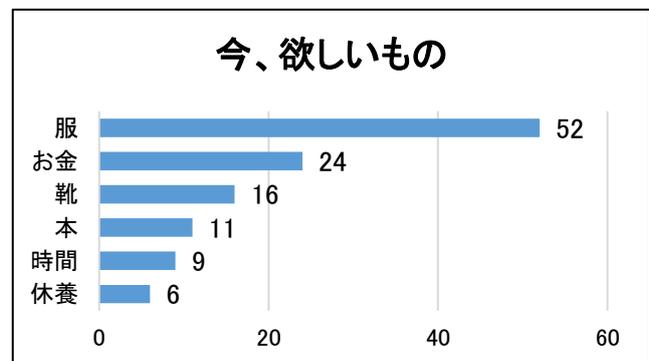


図6 学習前の家庭生活アンケート

数値からも分かるように、高校生の時期はファッションへの関心が非常に高い時期であるといえます。そこで、教材には多くの生徒が持っているであろう「ジーンズ」を取り上げることにしました。

また、共通教科「家庭」は、2単位の「家庭基礎」、4単位の「家庭総合」「生活デザイン」の3科目から選択履修できるものの、多くの学校が「家庭基礎」を履修しており、学習内容の多さに対して指導時間が不足している現状があります。「ジーンズ」を取り上げることで、消費生活と衣生活の内容について関連を図りながら学習することができ、指導時間が不足している状況を解消することにもつながると考えました。

**(ウ) 日常行う行為から問題解決的な学習の題材を設定**

日常の生活行為の想起

ジーンズという教材を活用するにあたり、生徒たちがより身近な問題として捉えることができるように、購入場面を設定することにしました。

ジーンズは、デザインはそれほど変わらなくても、組成繊維や原産国、ブランド等によって値段が大きく異なります。ジーンズの値段設定の違いを調べることで、背景にある大量生産・大量消費・大量廃棄、児童労働、環境負荷など持続可能な社会と関係の深い問題について知ることができます。また、組成繊維の違いから、それぞれの繊維の特徴を理解することもでき、衣生活の内容も一緒に学習することが可能になります。

このように消費生活を土台として他の領域との関連を図ることで、自分たちの消費行動と様々な生活事象との関わりを考えることができ、持続可能な社会づくりを目指した課題解決につながるのではないかと考え、題材を設定しました。

## (E) アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)

### 協働学習

#### の視点を取り入れた授業

高等学校家庭科では、生徒の思考力・判断力・表現力を育む観点から、適切な課題解決方法を探究する活動や、他者と意見を共有し、互いの考えを深めることを通して協働的な関係を築くような活動、衣食住などの生活における様々な事象やものづくりなどに関する実践的・体験的な活動を一層重視し、その過程で実感を伴って理解させるような活動が重視されています。まさしくアクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)の視点が重視されていると言えます。

しかし、問題解決的な学習や実験的・体験的な学習は行っているものの、主体的な学び、対話的な学び、深い学びになっていない状況もうかがえます。そこで、図7のような流れで学習活動を設定しました。事前意識調査の結果を示すことで、衣服の購入場面において、自分と違う意見があることに気づき、問題意識をもたせるきっかけになると考えました。問題意識をもつことで生徒が主体的に考えるようになります。また、事前意識調査を基に違う意見をもつ生徒が必ず一人は入るようにグルーピングを行い、意図的に他者と意見を共有する場を設定することで、深い学びにつなげることにしました。他者の意見を知ることで、多面的・多角的な見方の育成にもつながり、適切な意思決定や判断力が養われると考えました。

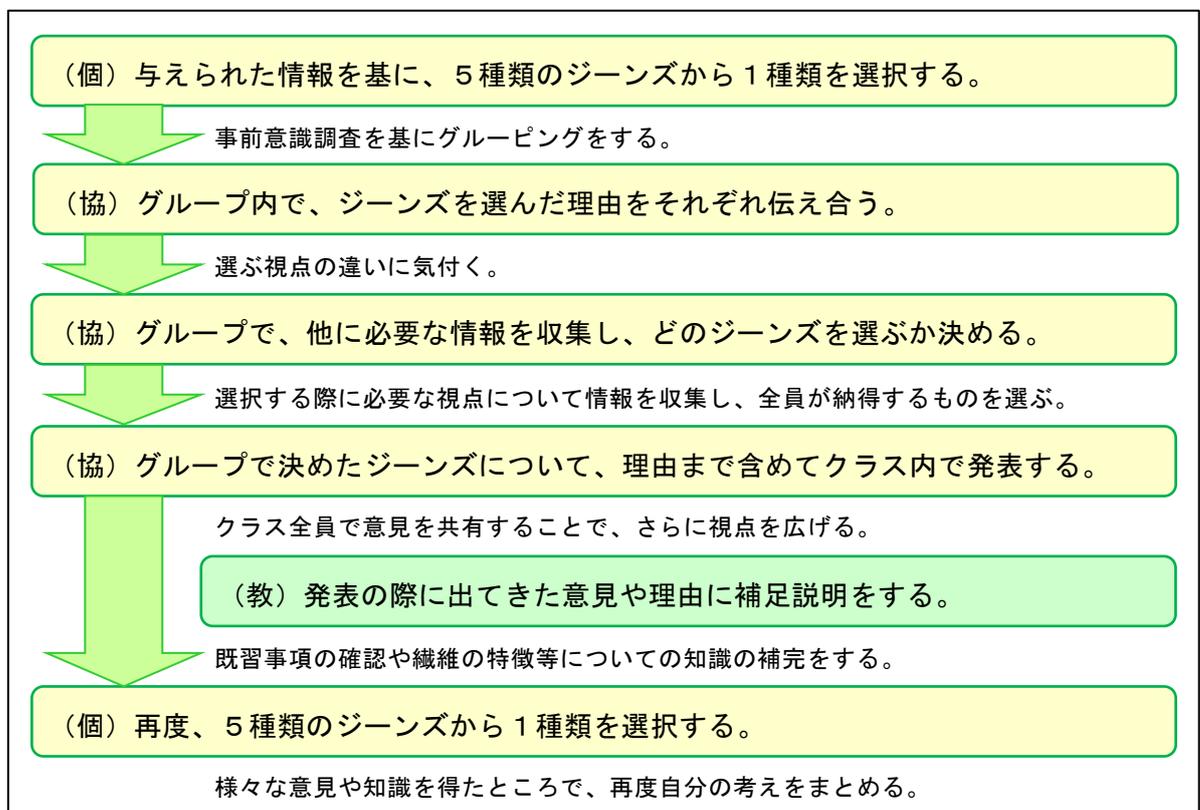


図7 協働学習の流れ

**(オ) 多面的な見方を育てるための思考ツールの使用****協働学習**

持続可能な社会を目指してライフスタイルを工夫するためには、まず、自分たちの消費生活と環境の関係を様々な視点から捉え、課題意識をもつことが大切です。しかし、授業の中で、いろいろな視点から考えるように伝えても、なかなか回答は得られません。

そこで、多面的な見方について活動を通して理解できるように思考ツールを使用することにしました。今回の授業では、まず自分が衣服を選ぶ時の視点を確認させるために「くま手チャート」を使いました。また、「同じようなジーンズなのに値段が違うのはなぜだろう」という問いに対して、関係する複数の要因を考え整理させるために「フィッシュボーン図」(図8)を使用しました。

思考ツールは、考えを可視化できるため、個人での学習場面に限らず、協働的な学習場面でも効果的なものであると思います。

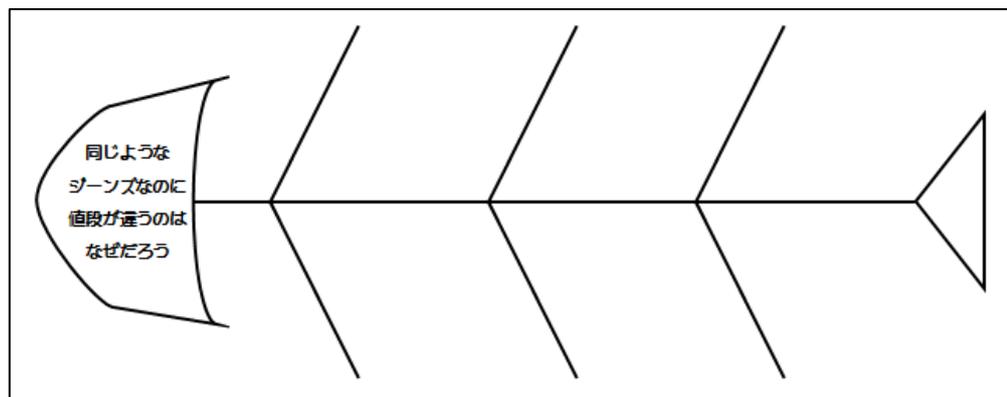


図8 フィッシュボーン図

## 《引用文献》

- (1) 神山 久美・中村 年春・細川 幸一編著 『新しい消費者教育』 2016年2月 慶應義塾大学出版会 p.3